



◇ バングラデシュ国気象観測・予測能力向上へのプロジェクトについて (第2報)

8月号に引き続き、バングラデシュ国（以下、バ国）「気象・予測能力向上プロジェクト」（測器校正・保守管理）の対象機関であるバ国気象局（BMD）の紹介をいたします。

バ国は日本の4割程度の国土（約14万平方km）に約1億4000万人が暮らしています。狭い国土に何故それだけ多くの国民が生活できるのか。答えは、国土の90%がガンジス河を始めとする大河のデルタ地帯で、その大部分は標高10m以下の低平地であり、その低地のほとんどが稲田、畑、放牧、養殖等に利用され、膨大な人口を支えています。

BMDには34箇所の上気象観測所があり、10箇所で高層風観測（PBO）が行われ、そのうち3箇所ではゾンデ観測（RS）が行われています。職員数はダッカ本部に約400人（予報官約40人、通信部門約100人）、地方観測所に約600人の合計1000人を超える職員がBMDで働いています。代表的な観測所を10箇所程度訪問しましたが、いずれも英国統治時代の気象測器が丁寧に整備・使用され、百葉箱や露場も整然と維持管理され、3時間毎の上気象観測が粛々と行われている姿には、バ国人の生真面目さを感じざるを得ませんでした。地上気象観測データは各観測所からダッカ本局に集約され、SYNOP報としてGTSに入力されます。データ送信にはインターネットを使ったデータ送信ソフトが導入されていますが接続状態が悪く、実際は普通電話や携帯電話、無線電話が使用されており、多くの通信部門職員が必要な理由となっています。

一方、気象測器の保守点検は、全国を4地区に分けてそれぞれに地区中心（RIC）を設け（図-1）、BMD本部や研究所（LABO）と連携を取りながら地区単位で定期的な点検（RICの準器をLABOの準器で校正、RICの準器で観測所の測器と比較観測）を行う体制を敷いています。しかしながら、予算や人員の制約があり、準器の老朽化 RIC 担当官（検査官）が欠員している等、十分な運営ができていないのが現状です。また、本プロジェクトの上位プロジェクトにおいてAWSが6箇所、自動雨量計が12箇所導入され、バ国においても観測測器のデジタルや観測の自動化が進みつつある現在、測器の保守点検体制そのものを見直す必要があることから、本プロジェクトが提起されたものと思います。

バングラデシュ気象局地区分担と国内RIC活動の現状
H250821までの聞き取り結果



図 BMDの地上気象観測所

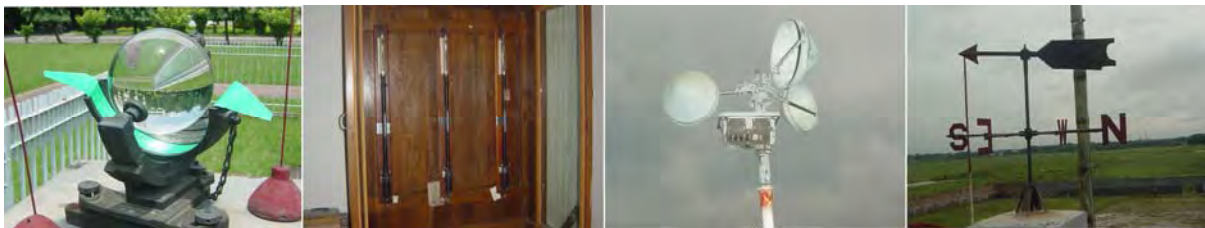


写真 懐かしの気象測器

(左から、カンペール-ストークス日照計、フォルトン水銀気圧計、三杯風速計、矢羽式風向計)

今後、BMD 本部の気象測器校正業務の実情や、地方観測所の測器維持管理状況等を調査する予定です。改めて紹介をさせていただきます。

(気象業務支援センター 振興部)